

グリフィスの福井時代の学生たち（二） ——山形仲芸——

沖 久也

はじめに

W・E・グリフィスは、一八七一年三月（明治四年一月）から一八七二年一月（明治四年一二月）までの一ヶ月間、福井藩の藩校明新館で主に理化学を教えたお雇い外国人である。彼がこの間に教えた学生たちに関して、筆者は先に本誌に「グリフィスの残したメモ『Students』（学生名簿）について」という題で報告し¹、また同じく本誌に「グリフィスの福井時代の学生たち（一）——中沢岩太²」を載せた。

本稿では、上記のメモに名前が載らないグリフィスの学生、山形仲芸について取り上げる。その名は「グリフィスの福井日記」³の一二月一三日に一度だけであるが「山形が私の家に住みに来た」とある。また、グリフィス夫妻が昭和二年に来福した際に福井市役所

が出版した『グリフィス博士』⁴の中に、グリフィスの教え子の一人として山形仲芸（仙台医学専門学校校長）の名があり、仲芸がグリフィスの教え子であったことは間違いない。

現在、山形仲芸の名は福井では忘れられているように思われるが、東京大学医学部を卒業後、岡山県立医学学校の教諭となり、その後、仙台に移り、第二高等中学教諭兼医学部長、仙台医学専門学校長、東北帝国大学医科大学長（初代）を歴任し、その間外科の教授を兼任すると共に附属病院の外科長として医者としても活躍した人物である。さらに仙台医学会や宮城県医学会の初代会長を務めるなど、黎明期の東北医学界にあって長年にわたって一貫して組織の頂点にあり、東北地方の医学の基礎を作った人物と言える。

また、藤野巖九郎と魯迅が仙台医学専門学校で出会い、魯迅の有名な「藤野先生」という小説が残されたことはよく知られているが、この両者が仙台医学専門学校に来ることになったきっかけをつくっ

たのも、当時同校の校長であった仲芸の決断によるものであった。

一 山形仲芸の略歴

山形仲芸の略歴は、玉手英典「宮城県医師会会長略伝（その一）」（以下「会長略伝」と称す⁵）の初代会長山形仲芸が最もまとまったものであるが、二・五頁の分量しがなく、少し誤りもある。そのほか『岡山大学医学部百年史』⁶にも一頁に満たない簡単な略歴があり、『日本人名大辞典（六）』⁷や『日本近現代医学人名事典』⁸などにも仲芸の名前はあるがいずれも詳しいものではない。本稿ではこれらを参考に、今回新たに見出した資料などにより加筆修正した略年表を最後の頁に示し、山形仲芸の生涯を見ることにする。

（一）誕生からグリフィスの来福まで（一八五七～一八七二）

「会長略伝」には、仲芸は「安政四年一月一日（一八五七年二月二〇日）に越前国足羽郡駕籠町に生まれ、幼名を男登介といた」とある。しかし、足羽郡駕籠町という地名は越前国にはなく、これは御駕籠町の間違いと思われる、また『岡山大学医学部百年史』⁶には父は新太郎とあり、出生地は「越前福井松ケ井上町」になっているが、これも誤りである。明治七年「町名改正新旧対照表」⁹によると、旧名御駕籠町は新町名では松ケ枝下町であり、現在の福井市宝永一丁目にあたる。

「新番格以下」（松平文庫九二三号）によれば、仲芸は明治三年に牧野繫門の養子になり、牧野男登介（卒族山形勝太らの弟也）と改

名している。養子先の牧野繫門は、明治二年に歩兵隊に仰せ付けとあるが、明治三年四月には仏語修行のため横浜へ行くことを願い、同月一九日に立立し、八月二五日帰省している。しかしながら、同年一〇月三日に病身につき立替を願い出て、養子牧野男登介ができたこと、さらに代勤として牧野元二が第二大隊十番小隊に仰せつかったことが記されている。すなわち、男登介は本職である歩兵隊の仕事は代勤が認められている。これはおそらくは牧野繫門の洋学志向の希望から、すでに明治二年にできていた明新館在籍中の男登介を養子にしたとも考えられるが、詳しいことはわかっていない。この略歴によると、明治三年二月に牧野元二が山形元二に改姓しており、この時理由はわからないが、男登介も山形男登介に改姓したと思われる、なぜなら、明治五年五月に男登介が山形仲芸に改名したことが先の「新番格以下」に記されているからである。なお、明治五年以後のことはここには全く記されていない。

（二）グリフィスの福井滞在時（一八七二～一八七三）

グリフィスの福井滞在期間は明治四年一月一日～明治四年二月一日（一八七二年三月四日～一八七二年二月二日）である。

この当時、仲芸の姓名は山形男登介であったと思われるが、「グリフィスの残したメモ Students」（学生名簿）について¹⁰でも記したように、理由はわからないが、このメモに山形の名はなぜか記されていない。しかしながら「グリフィスの福井日記」³の一八七二年一月一三日の所に「山形が私の家に住みに来た」とある。山形がいつまでこのグリフィスの新居に同居していたかわからないが、し

ばらくは同居していたと考えられる。なお、日記にも山形の名前があるのはこの一ヶ所だけであり、どのような交流が二人の間であったかはよくわからない。後述するように山形は助手の中野外志男と学生であった石田二男雄と一緒にグリフィスを追いかけて東京へ行っている。石田も二月二一日の「グリフィスの福井日記」に「明日から石田と湯村が家に来る」と記されており、一緒に東京へ行った三人は、この時期グリフィスの新居に同居していた可能性が高く、山形と石田はグリフィスが目を掛けていた学生であったと思われる。

(三) 福井から東京へ (一八七二)

仲芸に関するこの時期の資料は「グリフィスの東京日記」^⑩一八七二年四月九日の所に「中野、山形、石田、東京に着く」とあるだけであるが、このことから三人と一緒に福井から出てきたことがわかる。そこで「子弟輩」(松平文庫九二二号)の中野外志男の項を見ると、明治五年二月一八日に東京に向かったと記されており、明治五年三月三日(一八七二年四月九日)に東京に着いたことははっきりしたが、どのようなルートを通ったのか、その道中の様子などは全くわかっていない。

(四) 東京到着後から東京大学医学部卒業まで (一八七二～一八八二)

東京到着後の仲芸であるが、『岡山大学医学部百年史』^⑥などいくつかの略歴では、明治五年に南校の英語に入学とあるが、これは誤りと思われる。なぜなら明治五年の『南校一覽』^⑪には、仲芸と一緒に東京に出て来た中野外志男が英語二ノ組に、石田二男雄は英語五

ノ組に名前が載っており、またグリフィスに同行した中沢岩太の名もドイツ語三ノ組に見られるが、山形仲芸の名前はどこにも見られないからである。

仲芸は医学部を志望しており、その講義はドイツ人が行っていることを知っていたので、ドイツ語の勉強をしていたものと思われる。そして、明治六年(一八七三)に第一大学区医学校(明治七年に東京医学校、明治一〇年東京大学医学部に改称)二等予科一ノ組に入學している。

余談であるが、明治五年に東京で写されたと思われる、福井の学生六人がグリフィスを囲んだ写真が福井市立郷土歴史博物館にある。学生六人は上記の四人(中沢、中野、石田、山形)以外に福井の笠原格(カール)と肥後から来た本山である。

仲芸の東京大学医学部時代の史料はあまり残されていない。そこで彼の医学部時代の同級生である森林太郎(後の森鷗外)について記された中井義幸「鷗外の学生時代について」^⑫を参考にしながら、医学部時代を見ることにする。

明治六年一月に「二等予科一ノ組」に編入された新入生は二十四名で、前年度入学者二十四名およびそれ以前の入学者六名の計五十四名でクラスが編成された。新入生のうちで明治一四年に卒業した者は一一名で、鷗外と共に仲芸の名前も見られる。なお、同級生として、ジョン万次郎の長男中浜東一郎もよく知られている。彼は入学時に「二等一ノ組」であったため、新入生の二十四名には入っていないが、その後成績がよく明治七年には同じクラスに上がり、卒業年次は仲

芸と同じとなった。

入学当時、医学生は下谷和泉橋旧藤堂邸の寄宿舎に住むことが義務づけられていたので、ここに寄留していた。予科時代の仲芸の試験成績順位、予科二等生冬（明治七年四月の試験成績）は九番、夏（明治七年二月）二一番、予科一等生冬（明治八年四月）一一番、そして、夏（明治八年二月）六番である。この当時、七月の試験で最初のクラス分けがなされ、一月の学年末試験でほぼ五〇名の内三〇名だけが二等（一等）から一等（本科五等）に進み、上級からの落第生や編入生で改めて五〇人のクラスが編成された。すなわち、進級するのがかなり厳しかったことがわかるが、仲芸は学年でほぼ一〇番前後の成績で無事にクリアしていたことがわかる。

しかし当時の学生生活や交友関係を示すものはよくわからない。この当時、大学改編があり、明治七年五月七日に東京医学校に校名が変更され、校舎も同年一二月に本郷旧加賀藩屋敷に移転し、学生の寄宿舎も本郷に移っている。したがって仲芸は予科時代の最初の半期を除き、大部分は東京医学校に通学していたことになる。

明治八年一二月には、仲芸は無事に五等本科生になった。そして、本科五等生冬（明治九年四月）の試験成績は八位で、夏明治九年一月は一二位である。この年の学年末試験成績は学生の就職先に大きく影響するものであった。なぜなら、学制改革で東京医学校は明治一〇年四月一二日に東京大学医学部となったが、その機会に陸軍が将来陸軍軍医となる学生を官費生として採用することにしたためである。優等生を獲得せんと、既に文部省・内務省が予定している明

治一二年・一三年度卒業予定者を見送って、一四年度卒業生（本科五等生夏の席次）が主な選考の対象となった。採用者は一〇名でその内一名は薬剤官であった。仲芸の成績順位は一二番であったこともあつてか、陸軍軍医には採用されていない。

最後に卒業時の成績と卒業時期に触れておく。最後の卒業試験は明治一四年の二月に行われている。『新潮日本文学アルバム 森鷗外』¹³に東大新医学士成績順名簿（『文部省公報』明治一四年七月）の写真があり、二一番の所に「福井県士族山形仲芸 一三九九月」とある。これはおそらく東大の正式な卒業式が行われた七月四日の卒業者名簿（医学士の方）の写真と思われる。なお、卒業式は東京大学の全学部が一緒に行った最初の卒業式であるが、仲芸はすでに岡山医学校に赴任していて参加していないと考えられる。

（五）岡山時代（二八八―一八八八）

ここでは、岡山県医学校の着任時（のち甲種岡山県医学校に改称）から、新設された仙台の第二高等学校教諭医学部へ転任するまでを取り上げる。

しかし、実は岡山着任の時期がはっきりしていない。岡山時代の基本資料である『岡山大学医学部百年史』⁶の仲芸の略歴では「明治一四年（一八八二）東京帝国大学医学部を卒業し、直ちに岡山県医学校教諭兼一等医、ついで県病院副院長を任命され外科を担当」とあるが、確かな着任時は記されていない。また同書に岡山県の明治一三年六月から一四年七月までの医学校と病院関係者の人事異動が記されているが、ここにも着任については記されていない。ただし、

明治一四年七月の所に「医学教頭山形仲芸が病院副院長及び一等医となる」とある。これによると、仲芸は七月以前に岡山医学校には教頭として着任していて、七月に病院副院長に任命されたと思われるが、やはりはっきりした着任の日は記されていない。

なお「会長略伝」⁵⁾の山形仲芸の略歴には「明治一四年五月東京大学医学科を卒業する。同年六月岡山県立医学校教諭となる」とあるが、これを裏付ける資料は示されていない。このほか着任時期を記したものに、『岡山の医学』¹⁴⁾がある。ここには「明治一四年一月」とあるが、最後の卒業試験が行われたのが二月なので、それ以前に岡山に着任することあり得ないため、これは誤りである。

次に、なぜ仲芸が岡山に赴任したかを考えるため、当時の医学士の就職がどのようになされたかを、吉良枝郎『明治期におけるドイツ医学の受容と普及』¹⁵⁾を参考にしながら見ることにする。

明治七年八月に施行された医制で、病院長は公私立病院にかかわらず「医術開業免許を所持する者又は医学校の教育は学士の中でその学科に卓越した者」と定めた。そして、医学校には学生教育のために病院の併設が求められた。これは必然的に明治一二年以降に東京大学医学部を卒業し、医学士の称号を得ただけが病院長や医学校の教諭になれることを意味する。

これは日本中にドイツ医学に基づく西洋医学を普及する目的であった。その結果、まさに昭和四〇年代後半の一県一医科大学構想と同じように、明治一〇年前後には各県は医学校兼病院の設立を求め、医学士の派遣を要請した。その要請に対して赴任地を決定した

のは、おそらく東京大学医学部当局か文部省医務局のいずれか、あるいは両者の協議によって決められ、学生の出身地や希望は考慮されなかったと思われる。

仲芸の卒業した明治一四年の医学士二八名の就職先であるが、明治九年の成績で陸軍軍医に決まっていた七名、卒業試験の上位者二名はドイツ留学が決まり、各県の医学校に赴任した者は仲芸も含め一三人と五割以上を占めた。この際、職種は卒業成績が関係していたと思われる。なぜなら成績順位三番の中浜東一郎は福島県立医学校の校長であり、仲芸は一二番で教諭となっているからである。

なぜ、岡山県であったかであるが、岡山県には一三年度卒業の清野勇が病院長として赴任しており、医学校校長には一三年度卒業の管之芳（内科）がいたので、おそらく県側が外科医を文部省などに強く要請し、その希望にあった外科専攻の仲芸が岡山に決まったと思われる。

ここからは、岡山県医学校教諭時代の仲芸を、主として『岡山大学医学部百年史』¹⁶⁾によって記す。それに先立ち、簡単に岡山県医学校と岡山県病院の創設について述べておく。岡山県公立病院を岡山県病院と改称し、明治一三年六月一日に開医式が挙行されて、清野が病院院長に就任した。同年九月一五日には医学教場は医学校と改称された。おそらく、この時には管は校長兼教諭として赴任していたと思われる。すなわち仲芸は東京大学医学部を出た若い学士が急進的な改革をなそうとしているところに飛び込んだことになる。

明治一四年の岡山県への赴任時期は上述のように確定できていな

いが、一四年七月の岡山県の人事異動記録に「医学教頭から病院副
 医院及一等医」との記載があることから、二月に卒業試験は終り、
 その成績に基づき、四月か五月には就職先も決まり、卒業式が行わ
 れた七月以前に岡山に赴任した可能性がある。しかし、卒業式以前
 の赴任だったため、人事記録に日時が記録されなかったのかもしれ
 ない。

医学学校の最初の入学試験は一四年五月の予定であったが、定員に
 満たなかったためか、明治一五年一月二〇日まで試験上入学を許
 可するので志願者は申し出るべしとの広告が前年一二月八日の日付
 で出された。明治一四年に岡山県立医学学校も岡山県病院もできたば
 かりであり、その中で、仲芸は清野・管の両先輩ともに新しい西洋
 医学を岡山に根付かせようと奮闘していた。

その流れの一つとして、県病院が『医学月報』を発行することに
 なり、それに仲芸も関与している。第一号は明治一五年一月発行と
 なっているが、実際は四月頃であったかもしれない。この月報は明
 治時代における地方発行の医学雑誌の中でも古いものであり、明治
 一四年五月『大日本私立衛生会岡山支部雑誌』が発行されるまで、
 岡山県の医事情報伝達の役割を果たした。また、明治一五年三月、
 開業医の伝染病に対する知識および治療法の向上をはかるため「医
 会」を設立することになり、会長に管病院長、副会長に仲芸が就任
 した。

五月、文部省令で医学校、薬学校を甲乙二種に分けることが通達
 された。これは甲種学校の卒業生には開業医試験を免除し、開業医

になれるという制度である。教官に少なくとも三名は東京大学医学
 部を卒業した医学士がいて、重要な学科を分担できる体制とること
 など教育体制が整っているところが甲種学校と認定された。岡山県
 医学学校には四人の医学士（管、清野、山形、中浜）がいたので、中
 国地方でただ一つの甲種学校となり、甲種岡山県医学学校となった。
 ただし、この時点での役割、身分などの変更はない。

一〇月一六日、仲芸は他の医師の協力を得て、備前和気郡日笠村
 の田中ショウの卵巣囊腫の切除手術を行い摘出することに成功し
 た。この成功は西洋医学の力を示すものとなった。

また、一月二四日、四医学士の恩師である東京大学医学部のド
 イツ人教師ベルツが岡山に来た。ベルツはかねてより彼らから岡山
 地方における肺臓および肝臓ジストマの実態について話を聞いてお
 り、その実態調査のための岡山入りであった。この視察に基づき、
 翌年一六年四月、内務省は各府県に通達を出し、肺・肝臓ジストマ
 についての調査報告を依頼した。

また、四医学士は明治一六年一月に岡山に隣接した農村で、肝
 臓が肥大して死亡した農婦を解剖する機会にめぐまれ、胆管中に
 無数の肝吸虫を発見した。それが以前、石坂堅壮から県病院に標
 本として寄贈保存されていた肝吸虫と全く同じものであることを
 確認し、明治一六年一月に四医学士連名で「肺臓及肝臓ジストマ
 虫の実験卷ノ一」と題して発表した。ベルツもまた同じ年に「二
 三の新しい寄生虫について」（『ベルリン臨床週報』二〇、Nr、
 一六、一八八三）を発表し、日本の肺・肝臓ジストマ症という寄生

虫病が日本住血吸虫症とともに欧州の医学界に詳しく報告された。これには四医学士らの研究成果も載せられている。なお、仲芸の岡山時代の功績としてこの研究が挙げられることがあるが、これは四学士の共同研究であって仲芸個人の研究ではない。

明治一七年四月、岡山区西の丸で第一回岡山県医師開業試験が行われ、内務省衛生局から御用掛後藤新平が出張し、四人の医学士も試験官として参加した。

また同じ四月に「大日本私立衛生会岡山支部」の支会創立を協議した。当会はコレラ、チフス等の伝染病に対する知識およびその他の衛生思想の普及するのが目的であり、毎年春秋二会例会と学術講演会を行うことにした。また地方会員や一般に衛生思想を普及するために『大日本私立衛生会岡山支会雑誌』第一号が明治一九年五月に発刊された。仲芸はこの号に「親譲リノ因果」と題した文章を載せている。

明治一九年四月、勅令をもって中学校令が出され、全国は五区に分けられて各区に一つの高等中学校を設置することが決まった。その後、明治二一年一月に仲芸は仙台の第二高等中学校の教授兼医学部長として転任することになり、二月四日に松の江楼で送別会があり、八日に岡山を出て任地に向かった。

なお、岡山県立第三高等中学校となり、医学部長は岡山県立医学学校長の管之芳が横すべりで任命された。

岡山時代の仲芸は 東京大学医学部を卒業したばかりの新進気鋭の医学士であり、先輩の清野（病院長）と管（校長）の下で医学校

の外科教授、附属病院の副院長として岡山県に西洋医学を根付かせるべく努力していたことが評価され、全国に五校だけしか作られなかった高等中学校の一つである仙台の第二高等中学校の医学部長に抜擢されたのである。

(六) 仙台時代（二八八八―一九一八）

ここでは第二高等中学校着任時から、東北帝国大学医科大学を退職して小田原に隠居するまでの期間を取り上げる。時代の変遷とともに学校名や役職名は変遷するが、現在の東北大学医学部の黎明期から東北帝国大学医科大学の時代まで三〇年間にわたって組織の長として、また外科の教授として活躍した時期である。なお、この間に学校名が変遷をしているので、それに沿って仲芸の生涯をみることにする。ここでは主として『東北大学五十年年史、上巻』¹⁶及び『東北大学百年史一、通史一』¹⁷などを参考にした。

(1) 第二高等中学校・第二高等学校時代（二八八八―一九〇一）

明治一九年の中学校令により、翌年四月に仙台に第二高等中学校が創立されることになった。次いで八月には医学部の設置が決まり、明治二一年一月には仲芸が第二高等中学校教諭兼医学部長に任命され、四月に附属病院の宮城病院長を兼任することになる。

仲芸が仙台に着任した日ははっきりしていないが、岡山を二月八日に出ているので、二月中には仙台に着任したと思われる。

『宮城県史二一（教育）』¹⁸によれば、この時の医学部の生徒は明治二一年三月に廃止された東北各県（宮城、山形、秋田、岩手、新潟）の医学校生を一学年下げて編入した者たちで、四月一〇日より授業

を開始している。なお、『宮城県医師会史(医療編)』¹⁹には、生徒は編入試験で許されたとあり、はつきりしない面がある。しかし、第二高等中学校の医学部は東北地方の医学教育の中心地として重きをなす学校であったことは確かである。

明治二二年四月「仙台市制施行により名称を「仙台区医師会」を「仙台医会」に名称を改める(会長山形仲芸)」と『仙台市医師会史』²⁰資料編・年表にあり、この時仲芸が会長に推されたと思われる。しかし、「会長略伝」の略歴では二四年に仙台医会会長に推されるとあつて相違がある。また『仙台市医師会史』に明治二〇年からの歴代役員名の表があるが、明治二一―二三年の欄は名前が抜けていて、二四年一〇月の会長の項に山形仲芸がある。そのため、これに基づいて、二四年に仙台医会会長に推されたとした可能性がある。なお、六月と一〇月の仙台医会例会で仲芸は講演をしている。

明治二三年も仙台医会の四、五月の例会で講演をしている。一〇月に教員名称の変更があり、医学部長・教諭・助教諭は医学部主事・教授・助教になった。これにより仲芸は主事兼教授となっている。

明治二四年五月に東北医学会第一回例会が開催された。これは第二高等中学校医学部学友会第七回例会を改称したもので、第二高等中学校医学部の教官・生徒・卒業生により結成された。この医会は今も続いている。

明治二五年四月東北医学会会報第一号が創刊された。

明治二七年六月に高等学校令により、第二高等中学校医学部は第二高等医学部に改称された。仲芸は医学部主事のみである。

明治二九年六月仙台医会会報創刊第一号が刊行された。

仲芸は明治三〇年から二年間ベルリン大学医学部への留学を命じられる。この間の仲芸の動静を記した資料は極めて少なくよくわからない。三月にドイツに行き、ドイツで局所湿潤麻醉法を学んだ。また三一年には万国らい病学会議に日本代表として出席し、ドイツ皇帝に謁見している。そして、三二年七月には帰国した。

以下、帰国後の彼の仕事を確認する。明治三四年六月発刊の『東北医学会会報』²¹に「てんかん手術」の実験三例について報告している。この一例目は明治三三年一二月に行われたもので、日本での早期の脳外科手術の一つであり、外科治療勃興の先駆けに位置付けられる。すなわち、これは彼が帰国後に行なった一二例の「てんかん手術」の最初の例であり、ドイツ留学中に会得したものである。これらの結果は、明治三八年に提出した二本の学位論文の一本として報告された。ちなみに、もう一本の論文は「肝臓切除術に関する動物試験」に関するもので、ドイツ留学中ラングルハンス氏の教室に於いて四五頭の家兎の肝臓切除の割合と生存率を調べたものである。両論文の抄録は『若越医談』²²第一号に掲載された。

明治三四年一月、第一回宮城県医師会総会が開かれ、会長に木村達、仲芸は学術部長に選出された。また、この年の第三回日本外科宿題報として「盲腸炎及び虫様突起炎調査(一八三名)成績」を発表している。これは全国の内科医、外科医四〇〇〇余人にアンケートを送付し、一年間の虫垂炎治療の実態調査をしたもので、外科治療についての日本最初のまとまった報告であった。当時虫垂炎は内

科治療の時代であったことから、宮永悌二は『宝生会年鑑』巻頭言²³のなかで、同報告は外科治療の勃興の到来を告げるものであったと述べている。

(2) 仙台医学専門学校…東北帝国大学医学部専門学校時代

(一九〇一—一九一五)

明治三四年四月、第二高等中学校から医学部が分離独立し、医学部・薬学部からなる仙台医学専門学校となり、さらに明治四五年四月に勅令により東北帝国大学医学専門部に継承された。この東北帝国大学医学部専門部は、大正七年に勅令によって廃止されたが、その時、すでに大正四年東北帝国医科大学が設置されており、二校が共存していたことになる。仲芸は医科大学に所属となったが、専門部と大学に重なっている時には専門部の人事に係りしており、専門部が廃止された大正七年には東北帝国大学医学部を退職している。この間の仲芸について見ることにする。

明治三四年四月、仙台医学専門学校ができ、四月に校長心得となり、六月に正式な校長となった。そして一〇月に仲芸が藤野巖九郎を解剖学講師として採用している。

明治三六年七月、仲芸がドイツ留学中に得た知見に基づいて設計された宮城病院外科手術室が完成した。この手術室は当時の最新施設が完備したものであった。

明治三七年、仲芸は無試験・授業料免除で周樹人（魯迅）の入学を認めた。周は一〇月に仙台医学専門学校に入学したが、明治三九年三月には退学している。なお、魯迅の短編小説「藤野先生」の主

人公である藤野巖九郎と魯迅を引き合わせたのは、当時仙台医学専門学校校長であった仲芸であったが、このことは後でもう一度詳しく述べる。

明治三八年七月、仲芸は医学博士の学位を得た。明治三五年に一度学位を申請していたが、この時は博士会で必要な三分の二の賛成が得られず学位を取得できなかった。この経緯については、山形仲芸（仙台）、長尾精一（千葉）、菅之芳（岡山）、熊谷幸之輔（愛知）の四人の医学専門学校の校長を一括して博士士にするように博士会に働きかけた中浜東一郎が日記に経緯を書き残している。²⁴この時、博士にふさわしい学力があるかをみるために論文提出を求めることが決まり、これが現在に至る論文博士の制度の初めと思われる。仲芸は明治三八年四月に「自家ノ実験ニヨル対癩癩症穿顱術ノ価値ニ就テ」と「肝臓切除術ニ於ケル動物試験成績」の二本を学位論文として提出し、学位を得ている。

明治四〇年九月仙台医学会が成立し、会長に仲芸が選出された。一月には第一回例会が開催され、この時「膀胱切開の実験について」という演題で講演をしている。

明治四四年四月に仙台市医師会（明治四〇年一〇月発足）の第四回総会で会長に選出される。

明治四五年四月、仙台医学専門学校は東北帝国大学医学部専門部となり仲芸は部長となる。七月に仙台医師会の役員会で宮城県医師会の設立を決議した。

大正二年三月、宮城県医師会創立発起総会を開き、八月に創立総

会を開催、会長に仲芸が選出された。

大正四年七月に東北帝大医科大学が設置された。仲芸は医科大学長となる。

(3) 東北帝大医科大学時代から仙台を去るまで

(一九一五—一九一八)

ここでは東北帝国大学医科大学に移って教授兼医科大学長となつてから、仙台を去り小田原に移るまでの期間を取り上げる。

大正四年七月に医学部専門部の教授兼主事から医科大学の教授兼医科大学長になる。

大正五年四月に理由はわからないが学長を辞して、大学評議員となる。七月に高等官一等正三位勲二等に叙される。

大正七年四月東北帝国大学医学部専門部が廃止される。

大正七年五月、辞表を提出した。辞職願の全文は『東北大学百年史一、通史一』⁽²⁵⁾に載っている。仲芸の真意は、本官は医学部教授ではあるが、自分の気持ちとしては専門部主事・教授で医学部教授は兼務であり、そのため専門部主事が専門部の廃止と共に廃職となる上は医学部教授も辞職するといふものであった。なぜそのような気持ちを抱くようになったかを考えると、おそらく仲芸は仙台医学専門学校の校長であつた当時の悲願として東北帝国大学医科大学の創設を考へており、その前段階として東北帝国大学医学専門部ができ、次は専門部から医科大学に昇格させられると期待していた。そして、この時は当然それまでの名称変更と同じように教官や学生はそのまま引継ぎされるものと仲芸は考へていたと思われる。しか

し、期待は見事に裏切られ、在学生はすべて卒業させ、医科大学の入学は全く違うもので行い、教職員についても全ての人が医科大学へ移れないことがわかつた。すなわち、文部省に医科大学教授詮衡委員会が設けられ、人事はここで最終的に決められることになり、多くの教員が移れなかつたのである。

『東北大学百年史』には専門部教授であつた藤野巖九郎が医科大学の解剖学の教授になれず、大正四年六月に辞職したことが記されている。その理由として藤野が愛知医学校の卒業生であり、学士でなかつたことが考えられる。なお、仲芸は医学専門部主事であつたので詮衡委員の一人として参加している。このように教官の多くが退職することになり、仲芸の考へていた医科大学と異なつたため、ある種の責任感じて、自らも医学専門部の廃止が決まり、医学部教授を辞すことにしたと思われる。なお『東北大学五十年史』⁽²⁶⁾ではこの辞任について、仲芸は東北帝国大医学部ができて念願が達成されたので辞したと記していて違いがある。

七月、東北帝国大学の最初の名誉教授となる。

大正八年八月、東北帝国大学医学部に対する仲芸の功績をたたえ、また敬意の意味で寿像の建設が企画され、卒業生、在仙や中央医界の名士の寄付で造られた。なお、この像は昭和一八年金属供出の命を受けて無くなつたが、同窓会七〇周年に残されていた像の基礎石に銅板浮彫を貼つたものが現在校内に残されている。

九月、仙台市医師会会長を辞任。

十一月、宮城県医師会の臨時総会で辞任を申し出る。五月の通常

総会に上程された「診療料、往診料などの県下統一」の問題で県医師会と仙台市医師会の間でもめており、仲芸は両方の会長をしており、板挟みであったことも辞任の理由かもしれない。すでに、大学は退職しており、小田原に移り自適の生活をしたということとで辞任表明は承認され、記念品を贈呈することが決められた。

仲芸が小田原に移住した日時ははっきりしていないが、次男の武夫に送った一〇月三十一日付けの手紙が東北大学史料館に残されている。その送り主（仲芸）の住所は仙台であり、その中に小田原には来月下旬には移る予定で借家を借りるといったことが書かれているので小田原に転居したのは大正八年一月下旬と思われる。

(七) 小田原時代から死去まで（一九一九～一九二四）

小田原時代の仲芸の生活を知る手掛かりはあまりないが、上記の手紙以外にも東北大学史料館には次男に大正八年以降に送ったと思われるハガキや手紙が少しある。これらのうちで一年後の大正九年一月二七日付けの手紙は武夫から送られた鱒の礼状で、それ一杯飲んでよい気分になれたことや、暫く借りられる借家を見つけて三日に移転し、九日に披露内祝宴をしたことが書かれているが、この時の仲芸の住所は当然のこと小田原である。その他の手紙などは家族間の連絡事項などを記したものである。そして、医者として開業をしたことをうかがわせるようなことは書かれていないので、小田原時代は医師としての仕事はせずに悠悠自適の生活をしていただことがうかがえる。

大正十一年（一九二四）一月一六日、脳溢血にて死去。行年

六五歳であった。

二 藤野巖九郎・魯迅と山形仲芸

魯迅の『朝花夕拾』に収録されている「藤野先生」という短編がある。この題である藤野先生は、あわら市出身の藤野巖九郎であることはよく知られている。魯迅が仙台医学専門学校に入学したとき、仲芸は校長で、藤野先生は教授、魯迅は解剖学を習った。

ここでは、両者が仙台医学専門学校にやってきた際に、仲芸がどのような役割を果たしたかを見ることにする。この二人が仙台医学専門学校で出会うことがなければ、「藤野先生」は書かれることはなかった。

まずは巖九郎が愛知医学専門学校から仙台医学専門学校に移った経緯をみる。これは福井県文書館で二〇〇七年五月に開催された「藤野先生の手紙―仙台医専への道―」の展示資料を中心に述べる（ただし、手紙は藤野宛の手紙。文書館寄託）。

最初に明治三十三年五月二一日付けで東京帝国大学医学大学解剖学の小金井教授からのものを見る。ここには解剖学の欠員が金沢と仙台にあることを知らせている。ここから、五月以前に巖九郎が愛知医学学校から転任したい思いがあったことがわかる。そこで愛知医学学校は強い慰留のため、九月二日に助教諭から教諭に昇任させたが、話がつかなかったのか同月の二八日に休職を命じた。

巖九郎はこの休職中に再度東京大学の解剖教室で、おそらく小金

井教授ではなく、実質的にはその弟子であった大沢岳太郎教授から指導を受け、仙台医専への採用を仲介してもらっている。一〇月一五日付けで大沢が藤野に送った手紙には、藤野の件について大沢が仙台に問い合わせし、その回答を仙台医専の解剖学教授である敷波重次郎が大沢に送った手紙が同封されている。内容は「只今山形校長と相談したところ、元より講師より追次本官に採用可致。目下教授は定員に達してしており、如何ともしがたいが必ず教授に採用するようにすることは約束します」というもので、大沢が仲介していることが裏付けられる。なお、山形が小金井の東京大学医学部の一年後輩であり、お互いに当然良く知っているので、藤野の採用には、山形が小金井教授に解剖学欠員補充のために推薦を依頼したといったことも考えられたが、実際にはそのようなことはなかったようである。すなわち、仲芸は藤野の採用に関しては敷波の持つべきた人事を即決で承認し、将来、教授にすることを保証することでこの人事を後押ししたと思われる。

なお、この仲介者に関して、半沢正二郎「藤野先生追想」⁽²⁷⁾は大沢岳太郎教授とし、一方、泉彪之助「福井における藤野巖九郎」⁽²⁸⁾では小金井良精教授の名を挙げている。また、福井の山本正雄『藤野先生と魯迅の思想と生涯』⁽²⁹⁾では、大沢教授の推薦で仙台医専の山形校長を紹介されたとあり、少し違いがある。しかし、実際のところは小金井と大沢とともに東京帝国大学医学大学の解剖教室の教授であり、上述のように相談のうえ巖九郎を仙台医専に就職させたと思われる。

次に魯迅の仙台医専への道は、渡辺讓「魯迅の仙台時代」⁽³⁰⁾に詳しいので主としてこれにより記す。魯迅が中国人留學生のいない医専はないかと金沢医専の留學生に尋ねたところ、仙台を勧められた。明治三七年五月二〇日に魯迅（周樹人）の仙台医専入学の問い合わせが清国公使からあった。この返事として、五月二三日付けで山形校長は無試験で入学を許可するので、九月初旬に出頭するよう伝えてほしいと回答している。受け取ってから返事までの期間が三日間隔と非常に短く、山形校長と教務主任の内田守一教授の決済によるものと思われるとある。このことは『東北大学百年史五（部局史（二））の第一章の通史の七「周樹人の入学」で上述の入学は山形校長の大英断としている。すなわち、魯迅の仙台医専への入学は仲芸の力が大きいことがわかった。

三 教育者としての仲芸

仲芸は明治一四年に東京大学医学部を卒業後ただちに岡山県立学校教諭となり七年間勤めたが、この間どのような講義をしていたか示すような資料はない。明治二二年に新設の第二高等中学校の教諭兼医学部長に抜擢されていることから考えて、文部省からの教育者としての評価は高かったと思われる。

仙台に移り、第二高等中学校から始まり、第二高等学校医学部、仙台医学専門学校、東北帝国大学医学部専門部そして東北帝国大学医科大学の教諭や教授を歴任する。これらはいずれも現在の東北大

学医学部につながるもので、大部分は制度の変更に伴う名称変更と
 言つてよいもので、仲芸は東北大学医学部の黎明期から三〇余年に
 わたり外科教授を勤めた。また略歴から分かるようにその間組織の
 頂点を兼任して東北大学医学部の創設の祖と言える。この間に
 教えた学生は実に二千余名におよび、これらの医師は各々東北各地
 に散つて医業を営み地域住民の保険医療に貢献している、すなわち
 東北地方全体の医療の発展に教育者として貢献したことが分かる。

初期の講義に関する学生の感想などの資料はないが、大正五年頃
 の話が『東北大学五十年史 上巻』³¹に載っている。「その講義は漢文
 調の名調子で音吐朗々で、ワツセルマン反応を水人氏反応、頭部を
 ツブなどといったことが今も先輩たち語り草となつてゐるが、ノー
 トをとるには閉口した。そこで学生は講義の是正方を申し込みに先
 生宅を訪ねたが、反つてご馳走になり謡曲などを拝聴して引き下
 がつた。その後井上部長の注意もあつて間もなく講義を辞めた」と
 ある。また「会長略伝」にも卒業生の半沢正二郎の話として「先生
 は吞兵衛の方であつたが、学校の講義は真面目のものであつて、早
 口にペラペラと難解な學術語を述べてノートするのが大変難しかつ
 た」と記されている。

仲芸の講義は真面目になされていたようだが、どうも學術用語な
 ども明治期の古いもの使つていて、早口であり漢文調なところが
 あつて、学生はノートを取るのが大変であつた様子がわかる。一方
 で自宅を訪問できるほどに学生との距離が近く、慕われていた教師
 であつた様子がうかがえる。

四 管理者としての仲芸

学校の管理者および医学会の指導者としての仲芸について簡単に
 見ることにする。

まず、学校関係であるが、岡山時代は学校の教諭で付属病院の副
 院長であつたが、これは管理者とは言えない。おそらく菅校長を補
 佐して学校経営にも関与していた。その実績により、仙台の第二高
 等中学校の開設にあたり、文部省は仲芸を医学部長に抜擢し、東
 北地方の医学教育の中心をなす学校の運営を任せた。その重責に仲
 芸は十分応えたと言える。

その後、制度の変更などで学校名や肩書も変更されたが、一貫し
 て組織の長を務めた。すなわち、仲芸は現在の東北大学医学部の黎
 明期から東北帝国大学医学部の時代まで、三〇余年にわたつて組織
 の頂点にあり、現在の東北大学医学部の創立期の祖と言われている。
 これだけ長い期間組織の頂点にいられたのは、おそらく彼の優れた
 組織力のみならず彼の温厚な人柄によるものとも思われる。

仲芸は明治四四年に仙台市医師会会長となり、大正二年には宮城
 県医師会長を兼ねた。後にも先にも両会長職を兼任した者はいない。
 これは仲芸が仙台市のみならず東北地方の医教育界、医学会の最高
 権威であり、最も信頼されていた人物であつたことを物語っている。
 これに関連すると思われる話を最後に記す。大正一年に仲芸が
 宮城県医師会会長を辞任した際、「診察料、往診料などの県下統一」
 の問題で県医師会と仙台市医師会はもめていた。仙台市医師会の会

員は、当時の理事に対して辞任するように求めたが、会長である仲芸については辞任を要求していない。これは仲芸に対して会員の多くが日常に信頼し、特別な存在として敬っていたことの証左と言えるだろう。

五 外科医としての仲芸

岡山時代の外科医としての業績は、明治一五年の「卵巣嚢腫の切除手術」が成功した一例が記録されているだけで詳細は分からない。

つぎにドイツ留学以前について『宮城県医師会史（医療編）』から確認したい。同書に収載される仙台医学講演会の仲芸の演題を見ると、「外科的矯正法一般」（明治二二年六月）、「肝臓ジストマの病歴との発生、発育変化の実験」（明治二二年一月）、「卵巣切除術の治療と標本展示（患者出席）」（明治二三年四月）とある。この時期、仲芸は仙台に来たばかりで、自分を仙台の医師に知ってもらうために講演を行なったと思われる。その後、ドイツ留学まで講演はしていないようである。

ついでドイツ留学後について見ることにする、帰国後の明治三三年に「日本初のでんかんの脳手術」を行い、その後にその手術の症例を増やして、結果を博士論文にしている。これは日本のでんかんの外科的治療のみならず脳外科手術関する先駆的な報告の一つと言える。また、明治三四年に第三回日本外科学会宿題報告として「盲腸炎及虫様突起炎調査成績」を発表しているが、これは全国の内科

医や外科医に四〇〇〇余通のアンケートを送り、一年間の盲腸炎治療の実態調査したものである。当時の虫垂炎は内科的治療が主流で、現在のように盲腸手術という外科的治療ではなかったため、外科的治療法が実際どれ位されているかを調べた。そのうえで「我が国の外科的治療法はまだ芽時代であるが、欧米諸国の今日の隆盛を見るにつけ前途洋々であると信じる」と仲芸は記している。本報告が外科的治療勃興のきっかけとなったことから、外科学史においても重要なものであった。

最後に、仙台医学専門学校付属病院である宮城病院外科手術室について、『宮城県史 六（厚生）』から見ておく。この外科手術室は、仲芸がドイツ留学中に得た知見を基に設計し、明治三六年八月に完成したものである。工費は二万円のほかに暖房機、消毒器など備品に一万円余をかけ、ドイツの大手術室を模し、手術室は階段教室で臨床講義に要する階段テーブルを据え付けて中央で手術を施した。すなわち、学生が階段テーブルから教室の中央で行われる手術を観ながら講義を聞けるように造られているのである。屋根は二重のガラス張りであり、理学的装置で部屋が熱くならないようにしている。また、足で活栓を押すと水が出る手洗い装置はドイツから取り寄せたものである。消毒室は金属材料を消毒する機器と水を煮沸する機器を備え、いずれも蒸気仕掛けである。これだけの手術室はまだまだ日本にはなく、校長としてまた外科医として寝食を忘れて精魂を傾けて作り上げたもので外科医として誇るべきものであった。

山形仲芸はグリフィスの学生の中では異色の存在である、多くの学生は中級以上の士族や医者の子であるが、彼の父親は下級士族（卒）である。明新館は確かに身分にかかわらず一定の学力があれば入学は出来る制度であった。仲芸がどのように勉強したのかは分からないが、その努力は並大抵ではなく、その結果、明新館に入学することができた。そこでグリフィスの講義を聴き、西洋近代科学に凄さに目覚めさせられ、更に勉強したい思いが強くなり、グリフィスが南校に移ると追いかけるように上京した。

そこで理由は分からないが、医学の道に進むことにして東京大学医学部の入学にし、ドイツ人教師シュルツェに師事して外科医となった。卒業後は岡山県医学校などに五年間在職し、その後仙台に移り現在の東北大学医学部の前身である第二高等学校医学部、第二高等学校医学部、仙台医学専門学校、東北帝国大学医学専門部、東北帝国大学医科大学と移る。仲芸はこの間、外科教授とともに医学部長や校長など常に管理職の地位にあり、また医会でも仙台市医師会会長や宮城県医師会会長などその主導的役割を果たしている。

すなわち、仲芸は東北地方の医学教育および医学会の最高権威者であり、また最も信頼されていた人物であり、東北大学医学部のみならず東北地方の医学界の黎明期から三〇余年にわたりリーダーであり続けた。また、仙台医学専門学校時代には藤野源巖九郎と魯迅とを引き合わせきつかけになった人物である。

教育者としても、東北に近代医学を植え付けた先駆者としても、福井でもっと知られてもよい人物と言うことができよう。

謝辞

今回も原稿の体裁や校閲をして頂きました福井県立図書館の長野栄俊氏、福井関係の資料収集にご協力を頂いた福井県立図書館郷土資料班及び県文書館の方々、岡山県立図書館でレファレンスにご回答くださいました方々、仲芸の手紙のコピーをお送りいただきました東北大学史料館の高橋早苗氏に深謝いたします。

参考文献と注

- (1) 沖久也「グリフィスの残したメモ『Students』(学生名簿)について」(『若越郷土研究』第六〇巻一号、二〇一六年、一―一八頁)。
- (2) 沖久也「グリフィスの福井時代の学生たち(二)―中沢岩太―」(『若越郷土研究』第六二巻一号、二〇一七年、一九頁)。
- (3) 山下英一「グリフィスと福井(増補改訂版)」(エクシート、二〇一三年) 所収の「福井日記」。
- (4) 『グリフィス博士』(福井市役所、一九二七年)。
- (5) 玉手英典「宮城県医師会会長略伝(その一)」(『宮城県医師会報』No.三七七、一九七九年、一三三〇―一三三三頁)。
- (6) 『岡山大学医学部百年史』(岡山大学医学部創立百年記念会、一九七二年、一五六―一五七頁)。
- (7) 『日本人名大事典(六)』(平凡社、一九七九年復刻、三二〇頁)。
- (8) 泉孝英編『日本近現代医学人名』(医学書院、一九七九年復刻初版、三二〇頁)。

- (9) 『福井市史資料編一〇近現代』（福井市、一九九一年、一八八頁）。
- (10) 蔵原三雪「W.E.Griffis' Journal (1872/1/22、1873/3/25)」(『武蔵丘短期大学紀』第二二号、二〇〇四年)。これはグリフィスの東京日記の英文翻刻である。
- (11) 『南校一覽』（弘前図書館蔵）。
- (12) 中井義幸「鷗外の学生時代について」(『講座森鷗外第一巻』新曜社、一九九七年、一二六～一四五頁)。
- (13) 『新潮社日本文学アルバム一森鷗外』（新潮社、一九八五年、一七頁）。
- (14) 中山沃『岡山の医学』（岡山文庫(四二)、一九七二年、九八頁）。
- (15) 吉良枝郎『明治期におけるドイツ医学の受容と普及―東京大学医学部外史』（築地書館、二〇一〇年）。なお、この本書では山県と誤記されている。
- (16) 『東北大学五十年史上巻』（東北大学五十年史編集委員会、一九六〇年）。
- (17) 『東北大学百年史一通史二』（東北大学百年史編集委員会、二〇〇七年）。
- (18) 『宮城県史二一（教育）』（宮城県、一九五九年、六〇五頁）。
- (19) 『宮城県医師会史（医療編）』（宮城県医師会、一九七五年、二三九頁）。
- (20) 『仙台市医師会史』（仙台医師会、二〇〇〇年、七四五～七四六頁）。
- (21) 山形伸芸「癩癩手術の実験三例」(『東北医学会報』一九三九年、一七頁）。
- (22) 『若越医談』一号（若越医学会、一九〇五年、四七～四八頁）。
- (23) 宮永悌二「創立五〇年の年に―東北大学病院 脳神経外科」（平成二五年実生会年報）。実生会は東北大学脳神経外科の同門会である。
- (24) 中浜明編『中浜東一郎日記（第一巻）』（富山房、一九九二年、一九四～二〇〇頁）。
- (25) 『東北大学百年史一通史二』（文献17と同じ、一四六頁）。
- (26) 『東北大学五十年史上巻』（文献17と同じ、一三九頁）。
- (27) 半沢正二郎「藤野先生追想」（魯迅・東北大学留学百周年史編集委員会編『東北大学留学百周年魯迅と仙台』二〇〇四年、一六九～一七九頁）。
- (28) 泉彪之助「福井における藤野巖九郎」(『藤野先生と魯迅』刊行委員会編『藤野先生と魯迅―惜別百年―』二〇〇七年）。
- (29) 山本正雄「藤野先生と魯迅の思想と生涯」(勝木書店、二〇〇六年、一四頁）。
- (30) 渡辺讓「魯迅の仙台時代」(文献27と同じ、四六～七九頁）。
- (31) 『東北大学五十年史 上巻』（文献16と同じ、七五六頁）。
- (32) 『宮城県医師会史（医療編）』（宮城県医師会、一九七五年、二四二～二五一頁）。

表 山形仲芸の略歴

年	年齢	事 項	出典
安政 4年(1857)	0	11月(12月)、越前国足羽郡御駕籠町に生まれる	新番格以下
明治 3年(1870)	13	牧野繫門の養子となり、翌年山形姓に戻る	同上
明治 4年(1871)	14	[1月(3月)、グリフィスが来福し、12月(1872年1月)南校へ移る]	文献 3
明治 5年(1872)	15	2月(4月)、中野、石田と一緒に東京へ出る	子弟輩
		5月(6月)、男登介から仲芸に改名	新番格以下
明治 6年(1873)	16	第一大学区医学校(二等予科一ノ部)に入学	文献 12
明治 14年(1881)	24	東京大学医学部卒業(正式な卒業式は7月)で卒業式	同上
		以前に岡山県医学校に着任し、7月に病院副院長となる	文献 6
明治 21年(1888)	31	2月、第二高等中学校教諭兼医学部長として仙台に着任	同上
		4月、宮城病院医局長となる	文献 5
明治 22年(1889)	32	4月、仙台医会会長となる	文献 20
明治 27年(1894)	37	6月、名称変更で学校名が第二高等学校医学部となる	文献 17
明治 30年(1897)	40	3月、ドイツのベルリン大学に留学	文献 5
明治 32年(1899)	42	7月、ドイツから帰国	同上
		11月、宮城病医外科長に就任	同上
明治 34年(1901)	44	4月、第二高等学校医学部は第二高等学校から分離独立して仙台医学専門学校となり、6月、校長心得から校長となる	同上
明治 38年(1905)	48	6月4日、医学博士となる	同上
明治 44年(1911)	54	4月、仙台市医師会会長となる	文献 22
明治 45年(1912)	55	9月、東北帝国大学医学専門部となり、専門部主事となる	文献 5
大正 2年(1913)	56	8月、宮城県医師会が設立され、会長となる	同上
大正 4年(1915)	58	7月、東北帝国大学医科大学教授兼医科大学長となる	同上
大正 5年(1916)	59	4月、医科大学長を辞任し、大学評議員となる	同上
		[4月、東北帝国大学医学専門部が廃止される]	文献 17
		5月、東北帝国大学医科大学を退職する	文献 5
大正 7年(1918)	61	7月、東北帝国大学医科大学最初の名誉教授となる	同上
		8月、東北帝国大学医学部校内に寿像が設立される	同上
		9月、仙台市医師会会長を辞任する	同上
大正 8年(1919)	62	11月、宮城県医師会会長を辞任し、小田原に転居か	同上
			同上
大正 11年(1921)	65	11月16日、脳溢血にて死去する	同上